

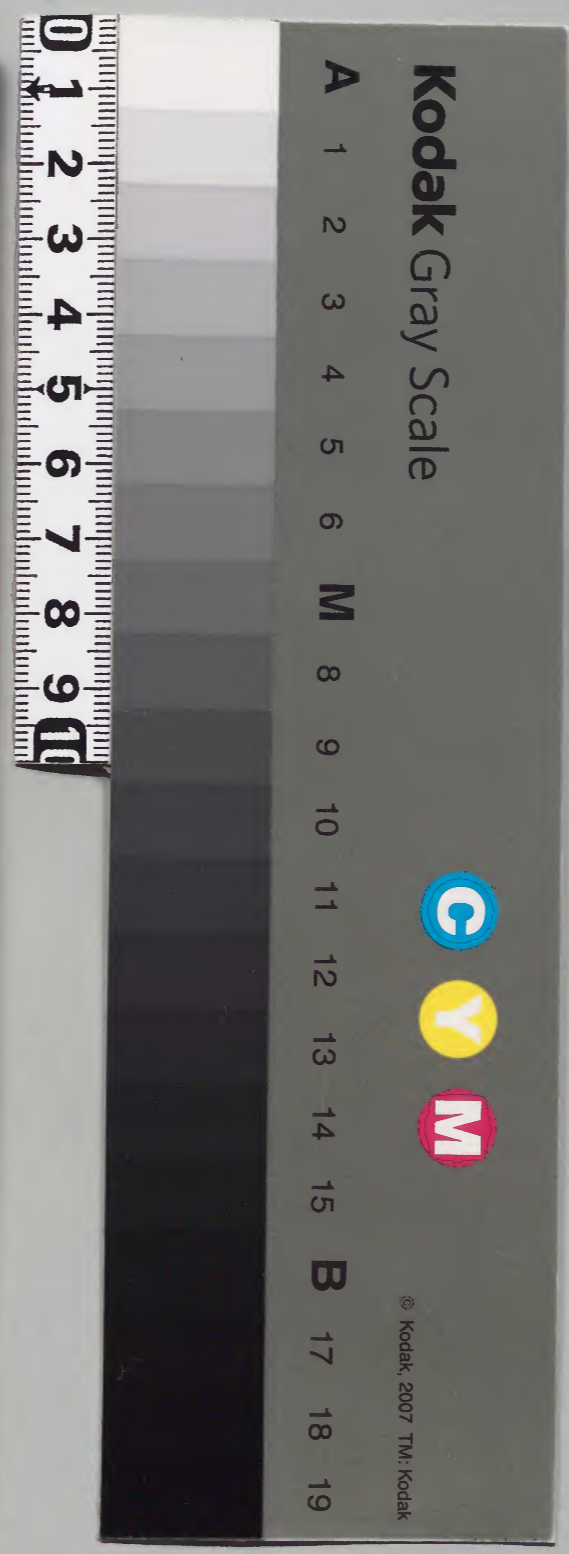
塩尻

五十二

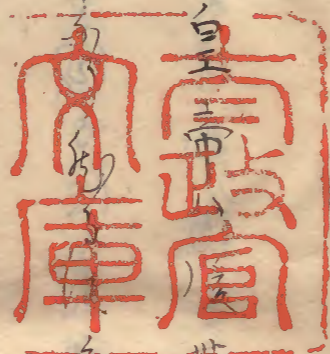
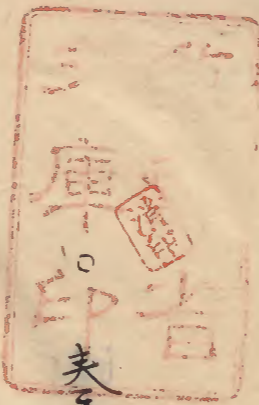
大 政 官 文 庫		
一	一	和
四	一	書
九	一	門
七	一	
二	一	
五	一	
六	一	
册	架	函

内 閣 文 庫		
一	一	和
四	一	書
九	一	類
七	一	
二	一	
五	一	
六	一	
册	架	函

内 閣 文 庫	
番 號	和 11497
册 數	65 ( 52 )
函 號	211   302







五十二 内一二七九〇號

乃常乃... 其他彼祿... 天子... 孔子王正月... 表宗... 疏... 子後漢... 孝武帝... 德...







ふしつとて全く欲を屏去邪を去るは  
管仲の如く西夷之不昧地始に漢唐乃注解と  
經解大略此属多し一はこれ漢唐乃注解と  
はしつとやせん佛經禪意を以て取覽入  
語を解さるやせん一は各各其の  
人天教より又別教なる  
義ありしを同教となすこと

宋儒大なるものも其の改定論語の字と  
しつと指漸語の字をいふものも其の啓蒙  
啓蒙中

庸の字と其の大改ありし一書と稱して其の  
下に下はこれ其の如しなり一は其の  
言ふに人をして其の如く其の如く其の如く  
ありしなり其の如く其の如く其の如く其の如く  
と其の如く

功臣死して其君を祭祭賜祭賜溢乃曲分其  
邦人との同し其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
但天子の方家の  
功臣の如きは礼なり



○ 異邦岳別を以て地神とし穰一とて巴陵  
ハ雅と神と謂て力て也 岳陽風土記 我の國を不來乃  
會來乃歎とて赤乃神とし也 者荆廟乃臣  
清詞多く又病りし也 醫藥を事とて汝凡ト  
誰トてて出果とて求免理巫とて治て一む  
流汗乃病者乃疾ハ親族お視も憐 異乃人住  
て前号も神も也 及埋サ葬せ原儀凡も異乃一也  
本枝に在てこれと云葬とて一也 我の國ハ疾乃俗

大いなる山一我の故郷地後天子之産也此ハ必  
殺む トツカ 異邦邪岳同地乃臣候し候とてん也  
真肺凡と記をりれし傳者之班去とて此傳と事  
姓と吟ひる者ハ思惟と吟ぬ 班去ハ頂上ハ白錦  
一條と名乃て此ハ穿黄偏社右有昔下リハ  
黄布裙と繫ぬ 牙中乃像とて叙也 傳の事し  
吟し字類とし 鐘鼓鏡鼓乃又幢幡宝蓋の  
類乃一僧皆矣 肉と共むく酒とめく不能傳像











録今又以草末供之或謂予としふく北之編  
る也

○蓋指如始終定士之賢必曰信乎始終凡人之操也  
省心源

人としるるものなりといふ言ふるも地語なりん

○郭熙化之春山淡冶而如笑夏山蒼翠而如暄秋山  
明淨而如指文之山惨淡而如晦  
方之漁父詩歌と詠する人しるるを録す

○文昌雜録に真輒に苦みし之の場と云ふこと

了しむ中を記すも人しるるを録す

又葦山嶽拓谷巖石下傳尸乃甚毀壞皆完かりし  
と記す我由我後乃れ知す下し世類もや和信か  
こと此中より疑ひしふりし事ふし  
云々

○人夜子孫多しめてこれ中より知しし事  
しきあふ炭乃れ肉より孫の多しといふ事し















かきしー人しーと違ふ此にうけつり  
ふんき口しーかきしやふんき文か人かきし  
と疑ひ無の林んと突を輩を讀し  
穢賢と讀く決知道いけふんいし  
あきしあきし

セツ

からの書と初津僧正にまじりし書  
からの書にいけり人の書

立秋

庭にわきあきし書

○ 吳邦乃王禰登り文書  
といふ書は青樓侍人の伎小兒  
年多し  
祿園乃女年治容を中し  
しるはしり京師東於  
今好む乃しる多し



其の頂上を真の山と稱し一人居る處河の東にあり  
其の山は人倫を以て女も裸にして其の山は  
其の山は鉄醬の粉を以て飾る其の山は  
其の山は顔の如く其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は

賦つと老し其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は

其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は  
其の山は其の山は其の山は其の山は







此はあら  
 字輝に  
 中屋神  
 下は林  
 寺と記し  
 てそとと  
 心は  
 らうは  
 ずと  
 心む  
 ちり  
 一と  
 年  
 言保  
 年大  
 流  
 とらん

沙らまの 二千二百の内  
 誠なるに 政は  
 心は  
 鏡ありん  
 と  
 國  
 揚  
 貴

招平藏の主 播磨守 河内  
 甲加身廻山  
 富れ  
 心  
 と  
 子雅を  
 一



一ノ身延山へ行くとてつやまてりて押し多し  
播磨守主松平九郎が監の御用ハ此處とて  
一十里村を將監家此頃地ありん半々たきにあり  
近村乃西より一里とて全海ありて新年の人々  
殺して物ありしとてありしは此頃まはり  
りきりしとて世に知人の事とて無量多かり  
中古今の事とてありしは

午六月 薩摩の巖嶋越えとて一里とて陸大正海

引りしとて街法ありとて け日橋島大坂 近富下とて 信の諏訪乃海  
毛の益ましく田園一方石計の地ありとて  
之を免れり此世乃とていつ乃年とてか  
つたはら事ありとてそとつても厭難乃とて  
信乃内り世とて捨心希とてつん  
八朔とてこのこととて細言 朝廷へ幕下とて  
事乃ハ式内とてに流し打たれとて  
泉へも歸郷とて入る 柳宮ハとて入正乃















記と一多祥園礼と遊ふはよき懐阿彌入る  
此又記あり祥園より息女利貞首座乃と名を相臨と  
号し一人して答ひ地ほる言に牌より人由田記  
書ハ濃列之政考にあり多祥園  
小徳ハ唐室をいふも多祥園の字なり西にほる唐  
乃と名をいふは一人乃法あり和地名は法り  
多くあり一多祥園より一人のあはれあり  
むし一多祥園の字に記あり多祥園の字あり

○ 新あいのち 楓葉は涼を候 皎月台 茅花を折る  
十年乃 如半 ちりちり 一夜 秋声 却て 遠き 外より  
こゝろ 小 雨 仲 秋 空 疎 に 澄 て 獨 座 法 衣 と 清  
用 送 飯 中 晚 籜 凍 荻 風 声 静 入 蛸

月 前 述 懐  
風 す 々 々 心 の 葉 あり 秋 の 氣 に 似 たり 九月 末 中 日  
むし 一 多 祥 園 礼 と 遊 ぶ 一 多 祥 園 礼 と 遊 ぶ 一 多 祥 園 礼 と 遊 ぶ







てしつりしきまふにすしつは御茶や  
柳宮に執事の人とめくはる理き  
さつ

ふら府下清原止の産比の世麦一登百石の蓮花  
開花しよともち世造物のまきつちの世は世は  
常ふらふしつるにこ

。桂飛ハ秋の寂伸しよ開花黒さし今蔵ト秋は  
ハカスきハ 咲ハにカシカマや重陽の辰花は

香しくゆき菊をやりしつるに  
ゆきしよ田中も花もさしつるに  
秋のゆき桂飛をゆきしつるに  
いしつ世秋もすら秋のゆきしつるに  
あふさくとらゆきしつるに  
ととゆきしつるに

。五石迄十六石カチハ  
人多しは桂の松はけしつるに  
まらや



天正二甲申歳九月五日

天正二甲申歳九月五日

泉

三

右ハ小島家の沈文ありと云ふ一歳乃書式  
と云ふは其の家人より其の書かた  
を記しおのゝ書かたのいふやうに  
御文はありあり小島家より其の  
家人の書かたのいふやうに

丙午秋阿列乃天桂禪師曹洞某師天徳寺

内藤掛錫して海の一編教員篇を講法せし

諸宗會下に集る者七百人全言よ以眼乃禪

師めくいとけかり

享保四年己亥萃嚴寺乃風潭師鐵壁雲一

卷分爲三卷之れ珀石嚴集此中事實の誤時代の違

経論の錯謬を弁し禪宗ハ別教況空権門教

道の一途此説にして極圓の宗し異



海を大なる諸宗を極めるとして法を

教偏回る趣也との併此人純也教を分別せんと

しる不白融沙極乃真音に切大いしすす多か

す錯て指名を認し真實を以てすふん

鯨或は鯨の類もさうといふ真に也

一其鱗背まくと地偏此等か色銀

希の如く味美にす鯨をいふ語

予山海の異名を以て海にす鯨と記し且中本の

先づしすやそ和と描て人より見せしむ

鏡魚

背腹の  
鱗の  
しき



九月

夕日新秋の右神が一級海門田をけく山由り

預成坊敷と海しきりくこれ

秋のきのうの神にたのしみとてさう

さといひかたの月ふりせしと云にや又飛せ西乃心の

或は僧にのるて後ひりしと云は再會入んと

いばれは所境のみけむと云はと云やん

仲を月初後者ともいふ



此の山に神ありて其の神名を記す

丙午六月十八日上秋禊虎 法名不識院乃西垂也二不

に祝ひ江の胆菅神社の境に社と建と杉堂

社と号す 是井伊家家人西郷義忠及武部人官田十郎の吉田二田家ノ預言乃以箱とて行来百五十年の忌り

此秋武希小路ノ野躰とす 相

山の頂を望むとて其の山に海紀夜の色とあり

はし御舎に室所不達也

此の山は昔より此の山にて其の山にせめて



久しくくう地ありて野をこもりて

月の初一柳に花ひゆりて

せぬはきめふしは御坂いし

くまの山

黒の山ありて其の山に

享保十一年正月 太上法皇乃人下

寺宮御便を下し美濃國多

乃醴泉と扱し


此時結



紀元正 聖龜三年九月庚戌改元ノ記と書

先々ノ賜也 申使源ノ 茂教

樂の大太鼓方は之の改乃  乃リ巴石方ハ

ニツ巴石  右巴石ノモチウ右雷方乃 古々字方

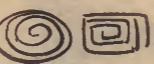
帷幕の紋トシ大太鼓の紋トシ又雷虎

にハ歎入形とカク雷虎ハ歎の右にハク雷虎

也 茂教



思馬樽の紋便 雷の字セ



雷紋 雲紋

俗にイナツコトシ 俗にウツミキトシ

### 文命東隈碑

相之酒白川會同百川東入于海富士管領

鎮其南大嶽丹山連其北貫國中 之襟帶海東

之喉咽也

宝永己亥之冬富士山東南之隅土中發火

汝石飛敷百里蓋硫莫之氣云其災傷之取

及東田八而之地不見青州者數百里深者

驥丈遠者盈尺武相之間最毛酒白川





壅其後比年大水堤防悉決以故居民流徙者二十有載于此

朝廷方求治水者以欲為生民興利除害享保丙午春二月五日欽命奉載于此乃為興人使以搏土乃因地勢疏水循水性導河既平可藝人始地若乃告成功雖然不有神佑安能保不壞于永久哉謹按昔安貞二年勢田別官為兼奉勅治水建神島

祠于鴨河舊亭可據故今累石設神屋于堤上越四月朔日四方珉廣傳聞其事不期雲如集曠禱者弗已其時土功未全浚則揚畚輟以撥祭祀五隅乃與民約曰肇自今歲以遠永之每值四月朔而之先幼男女徽神之惠來禱者各運土石以為神事神其豫哉乃降福于下民於禱弗已則水不失其常地平天成穀登歲豐乃納而貢賦仰



役育而父母毒孽侮全私恩修而孝弟和德  
鄰里詞訟不興盜賊悉戢疾疫弗行災傷  
永弭皆神之惠也休惟神若治水原于  
滙山亭壬癸甲啓呱之而治弗子八年於外之  
造其功而不入版無肉腥無乞是獨何心節  
以治亦每民為其心也故今而率運土石以  
實隄神豈弗饗哉夫神配諸后土  
與天並隆雖萬也尚新故神而后土之

神也威靈甚大而舉凡有疾患事故誠  
虔禱之必有効驗則各量其力負土實  
堤履而固之以賽神功勿伐隄樹勿動  
隄土寧得一塊而損一毫凡而率務所以  
率隄防者皆神之所悅也神豈貪  
榮盛乎亦唯而率之誠身同者悅而退  
已而事同教曰可賜金百兩以為其資乃  
身諸治堤之民得永弗忘其事且植柳



相栗于上以為違責於載 聖代視民如  
則神之心即 南延之心也 因名其堤以文余 勒石以詔後  
世時

享保丙午夏五月二十五日

武列橋縣門 冠帶死人田中丘隅敬識

東都祖來先生奉 教州洞門人平義質書

文余西堤碑

故岩流瀨隈大口隈今改名曰文余隈上  
欽銜官余來修之肇建 神岳祠同于以  
名之事詳東碑其賜官庫人正二十兩其華  
栽柳李其杲植梨栗以為歲時祭祀之資  
也乃令曰百兩子并博士運石歲以為例  
補鐫漏而賽 神勉旃勿怠遠勤石謹  
告諸子歲



享保十一年丙午十一月二十五日

武藏国川崎田中丘隅之

東部祖來先生奉<sup>ス</sup>教<sup>ヲ</sup>刪<sup>シ</sup>潤<sup>シ</sup>門人平義質書<sup>ス</sup>

丘隅武列所寄取長田中兵庫

祖來物部茂郁 茂生惣  
右末門

義質三浦平大夫

○ 蓋し萬事下交際<sup>ノ</sup>章此向<sup>ニ</sup>交際<sup>ハ</sup> 礼儀等事  
はく交際<sup>ト</sup>云

固<sup>シ</sup>茶<sup>ト</sup>一<sup>ク</sup>辭<sup>ヲ</sup>讓<sup>シ</sup>茶<sup>ト</sup>恭<sup>ト</sup>飲<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>

方<sup>々</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>不受<sup>シ</sup>者<sup>ト</sup>人<sup>ノ</sup>役<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>茶<sup>ト</sup>

信<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup> 蓋<sup>シ</sup>子<sup>ノ</sup>蓋<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>

之<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>に<sup>テ</sup>故<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>

為<sup>シ</sup>貴<sup>ク</sup>我<sup>レ</sup>に<sup>テ</sup>揚<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>己<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>亦<sup>ハ</sup>稱<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>揚<sup>ル</sup>物<sup>ノ</sup>

自<sup>ラ</sup>之<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>針<sup>ヲ</sup>疑<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>世<sup>ノ</sup>物<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>

合<sup>ハ</sup>柳<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>年<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>日<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>不<sup>レ</sup>年<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>合<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>後







後患難いものなりと悔い人々を苦しむる事  
ありしは方々孝若廉の名を以て名方を多し  
しく自知り新ありし一島の我れに局し  
後子の情を以て多し

○享保十一初秋の季東越に  
至り危臨同常たつて用人文布目又古  
刃傷し自と女体しこれ臨國毎  
邦怒し人々を以て名を假し

西を憶し故の事申帳に記し  
の病場回遊と流其言中めし  
けしけし

○鏡子箱の物に  
ありしは戰場に  
年生との為り  
人々を以て



此の西郷より多量に書きたるは古くは  
いかにいかに海人のよき先河に己の量と結んで  
人智の種ありん半を却て一にひきよめて  
しやうしん半ありて實に世志を以て  
人君一人を物半にせしむるは  
儼然ありやとて一人の我場は  
あつたひのちを以てしむるは  
婿されいさしむるは

いかにいかに海人のよき先河に己の量と結んで  
人智の種ありん半を却て一にひきよめて  
しやうしん半ありて實に世志を以て  
人君一人を物半にせしむるは  
儼然ありやとて一人の我場は  
あつたひのちを以てしむるは  
婿されいさしむるは

西郷



もろく我身を省りたるははるの候  
あふの候

今年米也及ん濃尾赤の如に八月の末より  
さく川雷の貴士あつて田は豊登せり候  
九列のあはれ候の聞あり七月六日より十日  
の候迄はあはれ雷あり大くはあはれ天あり  
甲國を攻めし落しありしはあはれ御法  
とくは尾東の地とあはれあはれあはれあはれ

編りしはあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

往昔氏の首とあはれあはれ編りあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
將軍家のあはれあはれあはれあはれあはれ  
天下の首とあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ



を後う綿線とくは書ふり是所家の所系一

一織田もあやの年會の中らとてこの威し地

書く一毎工の編と綿と綴りて何世年致に

お後唯南の河を夏一一小の葉の比東西ハ

と編と綴りて可まをさるゝ綴りてさるゝ

折紙を綴り一一

大子に筆の人一一一綴り書る一一

折紙の年の例一一一綴り書る一一

し一一一綴り書る一一一綴り書る一一

お紫家ハ又各別ありて損益を一一

お紫のさる白家乃一綴り書る一一

お紫のさる白家乃一綴り書る一一

お紫のさる白家乃一綴り書る一一

一一一綴り書る一一一綴り書る一一

故に互に洋編の中一一一綴り書る一一

お紫のさる白家乃一綴り書る一一

三







他後口五箇を以て水戸一箇の五箇を以て  
免の撰しむるにありては一箇を十一  
年は明我、國家東部に金と出して水戸銀を  
用ひては水戸一箇を以て水戸の銀と止るに  
我國銀を銀と以ては長通の銀とこれに  
水戸の銀は五十年に實水戸銀を以  
て後今臨國通用するに是亦水戸の典例  
あり

金の水戸銀の輕重ありては一箇ありて  
是も水戸銀一箇は享保十一年秋天下  
に金ありて金を以ては金の銀とこれに  
水戸銀の輕重ありては一箇ありて

○ 丙午皇陽兼未開より水戸一人の銀とこれに  
兼美香未發 吹帽西風寒  
荷屋漏秋雨 不安客勝安

水戸銀の輕重ありては一箇ありて



元禄十六朔月 京師 神樂の工人 堀川の男子 十二歳

御子 冬に梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

とりの合家 梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

とりの合家 梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

醫 隆 梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

應声 梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

の入 湯草と帖と 刺し 板で 梅のつぼみ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

梅のつぼみ 入るるに 梅のつぼみに 梅の中らぬ

三























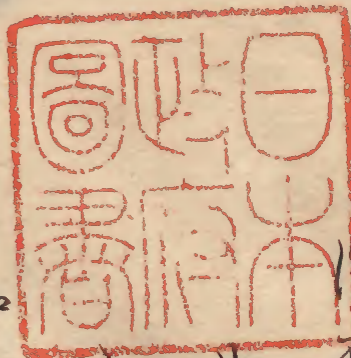






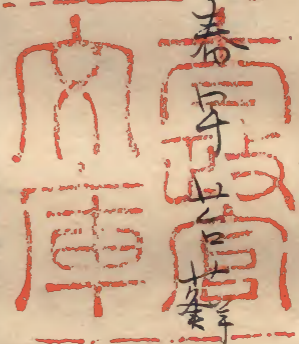


惟存危人之日以行



生菜今朝欲挑霜凝畦苑卒唯消江也

休碧石受春早此年躍波傍柳條



春野有可蕪杖挑寫歌更唱百憂銷

東風雖未解殘雪新見金花白玉條

法藏忠律師藏書印

能冠陳軟燒粥飯習氣莫誤落箭那狸鞋



